

令和 2 年 5 月 28 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02587

研究課題名（和文）敦煌書儀による書記言語生活解明のための基礎的研究

研究課題名（英文）A basic study for clarifying written language life by Dunhuang Shu-Yi manuscripts

研究代表者

楊 莉 (YANG, LI)

奈良女子大学・大和・紀伊半島学研究所・協力研究員

研究者番号：60760486

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：敦煌書儀伯三四四二の「吉凶書儀」について、翻刻、加點、語釈、意識など注釈作業ができた。さらに、敦煌書儀の語彙や表現について、日本古代の文献資料との比較検討も行った。その検討の過程で得られた新たな知見については、補注という形で纏めている。補注には、書簡用語や書簡の文化的背景に関する新たな知見も盛り込むことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

敦煌書儀写本の写真を活用して、翻刻、加點、語釈、意識という作業で、個々の書簡の内容を解読し、言語表現の特徴、用語の語義と機能、語に反映される人間関係などを明らかにした。そして、正倉院文書の啓・書状や木簡、日本の古代文献資料にみえる書簡類に使用された用語や表現との比較検討により、実用生活における書簡用語の書記言語資料としての位置づけや書簡の文化的背景に関連する研究に新たな知見を提供した。

研究成果の概要（英文）：With regard to the "Auspicious Shu-Yi" of Dunhuang Shu-Yi Pel.chin.3442 manuscripts, we made annotations such as reprinting, adding points, vocabulary, and free translation. In addition, the vocabulary and expressions of Dunhuang Shu-Yi were compared and examined with ancient Japanese literature. The new findings obtained during this study process are summarized in the form of supplementary notes. The supplementary notes could include new knowledge of the letter term and the cultural background of the letter.

研究分野：敦煌学

キーワード：敦煌書儀 伯三四四二 吉凶書儀 外族吉書儀 内族 書疏 通婚書 答書

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

近年、敦煌書儀に関する研究が進み、新しい研究成果が発表されている。周一良と趙和平は書儀の写本の翻刻と整理に力を入れ、共同で『唐五代書儀研究』を著した。また、趙和平は周一良の指導を受けて、『敦煌写本書儀研究』を完成させた。

その後、呉麗娛が『唐礼摭遺—中古書儀研究』を著し、『朋友書儀』・『吉凶書儀』・『表状箋啓』の三種類の書儀の起源・残存状況・及びその背景や変遷について詳しく考察し、書儀の内容的な繋がりや発展について述べた。さらに書儀の文体の形式や書儀特有の用語を指摘した。

張小艶は『敦煌書儀語言研究』を著し、言語の角度から書儀を研究した。書儀の特徴、内容、形式について詳しく述べられている。そこでは、書儀に見える俗字、誤字、書儀に用いる記号が検討された。

以上が中国国内の研究現状である。史的な研究は十分なされているが、言語的な面からの研究がまだ手薄だと言える。

日本では、書儀について古くは内藤湖南、那波利貞、山田英雄の諸氏によって研究が始められた。近年では、伊藤美重子「敦煌の吉凶書儀にみる凶儀について」、丸山裕美子「書儀の受容について～正倉院文書にみる「書儀の世界」」、古瀬奈津子「書儀・書簡よりみた日唐古代官僚制の特質」などの諸氏によって研究が進められている。各氏は自分の専門分野との関連から問題を提起し、研究を進めた。一方で語学的な面からの研究は、杜家立成雑書要略注釈を除いて進展が少ない。

さらに、敦煌書儀の解読、注釈など基礎作業がきわめて断片的であるため、中国語学者以外の日本語国語学者にとって、参考の資料として利用するのがまだ不便である。

こうした中で、本研究の申請者はこれまで敦煌書儀を研究対象とし、書儀の言語表現を中心とした研究を行ってきた。2015年から王羲之の書簡を日本語・日本文学の研究者と読む機会があり、書儀の表現と日本の古代資料との比較が必要であると考えようになった。日本語で敦煌書儀の注釈、訳文を作ることによって、日本語との対照を容易にし、それによって古代日本語の文書および書簡作法への影響を考えるとゆくことができると考えるに至った。

2. 研究の目的

敦煌書儀研究において、写本の翻刻、内容に関する歴史・制度史の視点からの研究は増えつつあるが、書儀を全体的に注釈したものはまだない。そこで、これまでの研究代表者の敦煌書儀の語彙研究の成果によって敦煌書儀を解読し、個々の書儀に日本語で注釈を加え、敦煌書儀の内最も古い「吉凶書儀」の注釈を作成する。

書儀を読み進めることによって、書簡文の書き方、用いられる表現、選択される用語の傾向及びその用語の語義、語の機能、用語に反映される人間関係などを明らかにすることができる。個々の書儀の注釈を蓄積することによって、書簡文の模範例としての書儀が、文言と口語とをつなぐ実用世界での書記言語生活を解明する資料となることを実証的に示すことができると考える。

書儀は南北朝から始まり隋唐に流行したが、書目が記載されているだけで、書儀の具体的な内容が確認できるのは宋の司馬光の『書儀』だけであった。敦煌莫高窟より発見された歴大な古文書の中に含まれる書儀は、宋代以前の書儀の内容を具体的に検証する資料として

極めて貴重である。この敦煌書儀の読解と検討に基づいて、実用世界における書記言語生活を明らかにすることが本研究の特色である。

また、敦煌書儀は、第一次資料としてそれ自体研究に値する諸側面を有しているが、隣接諸領域に対してもこれまでにはない豊富な用例を提供する点に重要な価値を見いだすことができる。特に、古代日本語研究、日本古代文学研究、日本古代史料学研究に資するところは大きい。仮名が登場する9世紀以前は、中国語の文字である漢字漢文を用いることでしか書記言語が成り立たなかった古代日本語研究、日本文学研究にとっては、本研究において作成する「敦煌書儀注釈」の成果は、これまでの漢籍研究では得られなかった、新たな知見を提供すると思われる。

3. 研究の方法

文献調査、検証

研究の基礎作業として、写本の校訂から始める。先行研究の校録書を参考にしつつ、写本と比較検討し、オリジナル校訂文を正確に確定する。可能な限り、確認できる書儀の写本を検証した。

注釈書を作る

作成した書儀の校訂文について、古代日本語研究を専門とする桑原祐子・中川ゆかり（共に研究分担者）と共同で日本語による注釈書の作成を進めた。

【2016年度の研究方法】

研究計画の初年度では、書儀の内容を含む写本及び関連する図書・資料を収集することが必要となる。そのため、2016年9月に北京の中国古文書の専門書店において、敦煌文献・敦煌書儀に関する図書を購入した。そして中国国家図書館で研究に関わる論文・資料を集めた。また、大谷探検隊による収集された資料を収蔵している大連図書館・旅順博物館に行き資料調査を行った。2017年3月、敦煌学の研究者と共に大連・旅順に行き現地調査を行った。旅順博物館の館長を訪ね、研究について貴重な教えとアドバイスを受けた。そして、旅順博物館が公開した敦煌文書の資料を購入した。

敦煌書儀の写本、関連資料を収集すると同時に、資料の内容を分析する作業も行った。『敦煌写本書儀研究』などの校訂文を参考にしつつ、これまでの釈文に反映されていなかった異体字や記号に検討を加え、より正確な校訂文を作成する作業を進めた。毎月研究会を開催し、日本古代の言語研究・日本古代文学研究に資するように、日本語による注釈の準備を整えた。

【2017年度の研究方法】

2017年度から日本古代散文の研究を専門とする研究者をメンバーとして加えた。さらに、日本古代における書状をも念頭に置きながら、引き続き日本語による敦煌書儀の注釈を行った。

伯三四四二の「吉凶書儀」の一部である外族書儀について、『敦煌写本書儀研究』などの校訂文を参考にして、これまで注目されていなかった内容に詳細な検討を加え、日本古代の言語研究・日本古代文学研究のメンバーとともに、新たな知見を盛り込みながら日本語によ

る注釈の作業を継続している。

既に伯三四四二「吉凶書儀」の「与子姪孫書」「与外祖父母書」「与舅舅母姨姨夫書」「与表丈人及表姑姨表兄姉書」「与表弟妹書」「与女婿書」「与妻父母書」「与外甥孫書」「与婦書」「通婚書」については翻刻、加點、語釈、意識の作業を終了した。それぞれの書簡の内容を解説し、言語表現の特徴、書簡用語の確定、その語義と機能、語に反映される人間関係などについて検討を行った。そして、古代日本語の一次資料である正倉院文書の啓・書状や木簡、日本の古代文献資料にみえる書簡類に使用された用語や表現との比較検討を継続して行い、さらに実用生活における書簡用語の書記言語資料としての位置づけや書簡の文化的背景に関連する新たな知見についての注釈の作成を行った。

【2018年度・2019年度の研究方法】

2018年度から、注釈した内容について、再検討を加えた。検討を重ねた上で、補注の作業を行った。その結果、『杜友晋撰「吉凶書儀」(伯三四四二)の注釈と研究』を刊行した。

4. 研究成果

敦煌書儀の読解と検討に基づいて、実用世界における書記言語生活を明らかにすることが本研究の目的である。

敦煌書儀を含む写本を収集し、敦煌書儀の全体像を把握した上で、敦煌書儀の中で一番長い写本である伯三四四二の「吉凶書儀」を注釈の対象として解説・注釈を行った。伯三四四二の「吉凶書儀」(作者：杜友晋)は、上巻は吉書儀、下巻は凶書儀というように総合的な書儀である。「外族書儀」・「内族書儀」・「婦人書儀」・「僧人書儀」・「四海書儀」等の内容を含んでいる。書儀一つ一つの内容を解説し、言語表現の特徴、書簡用語の確定、その語義と機能、個々の語に反映される人間関係などについて検討を行った。合わせて、古代日本語の一次資料である正倉院文書の啓・書状や木簡、日本の古代文献資料にみえる書簡類に使用された用語や表現との比較検討をも行った。

伯三四四二の「与子姪孫書」「与外祖父母書」「与舅舅母姨姨夫書」「与表丈人及表姑姨表兄姉書」「与表弟妹書」「与女婿書」「与妻父母書」「与外甥孫書」「与婦書」「通婚書」・「答書」については翻刻、加點、語釈、意識という作業を行った。それぞれの書簡の内容を解説し、言語表現の特徴、書簡用語の確定、その語義と機能、語に反映される人間関係などについて検討を行った。そして、研究分担者と共に、現地調査も実施し、現地のみで閲覧可能な資料を確認し、現地で貴重な文献資料や書籍を入手した結果、研究課題は大きな進展を得ることができた。

本研究においては、敦煌書儀による書記言語生活に用いる表現と、日本の古代資料との比較を行っており、検討の過程で新たな知見も得られた。以上の検討結果に基づいて、書簡用語や書簡の文化的背景に関連する新たな知見についての注釈『杜友晋撰「吉凶書儀」(伯三四四二)の注釈と研究』を刊行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中川 ゆかり	4. 巻 特別集
2. 論文標題 破棄された手紙ー下級官人下道主の逡巡	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 萬葉語文研究	6. 最初と最後の頁 35 - 56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 楊 莉	4. 巻 第59号
2. 論文標題 敦煌書儀「吉書儀」における用語の特徴 「手紙」を表す言葉の使い分けについて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中国語研究	6. 最初と最後の頁 26-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑原祐子	4. 巻
2. 論文標題 写経生・実務担当者の選択 「啓」という書式を選ぶとき	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 奈良女子大学古代学術研究センター『漢字文化の受容 東アジア文化圏からみる手紙の表現と形式』 報告集	6. 最初と最後の頁 66～83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川ゆかり	4. 巻 62
2. 論文標題 振媛の帰国ー『日本書紀』継体紀と『上宮記』逸文と	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古事記年報	6. 最初と最後の頁 1～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 桑原 祐子
2. 発表標題 清潔と清浄 日本古代資料「正倉院文書」の事例
3. 学会等名 国立歴史民俗博物館 産学共同研究第4回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桑原 祐子
2. 発表標題 正倉院文書を読み解く
3. 学会等名 奈良学園公開文化講座（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桑原 祐子
2. 発表標題 帙了暇の実態と表現
3. 学会等名 正倉院文書研究会（第2回）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 桑原祐子
2. 発表標題 写経生・実務担当者の選択 「啓」という書式を選ぶとき -
3. 学会等名 第12回若手研究者支援プログラム「漢字文化の受容 東アジア文化圏から見る手紙の表現と形式
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 桑原 祐子
2. 発表標題 正倉院文書にみる実務官人の言語生活
3. 学会等名 佛教大学国語国文学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 桑原 祐子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 竹林舎	5. 総ページ数 560
3. 書名 古代の文字文化	

1. 著者名 中川 ゆかり	4. 発行年 2017年
2. 出版社 竹林舎	5. 総ページ数 560
3. 書名 古代の文字文化	

1. 著者名 桑原祐子(共著)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 384(111-156)
3. 書名 正倉院文書の歴史学・国語学的研究 解移牒符案を読み解く	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	桑原 祐子 (Kuwabara Yuko) (90423243)	奈良学園大学・情報学部・教授 (34604)	
研究 分 担 者	中川 ゆかり (Nakagawa Yukari) (30168877)	羽衣国際大学・人間生活学部・教授 (34436)	